

「伊達秀宗公物語」の配布は終了いたしました

伊達秀宗公物語  
だてひでむね  
—政宗との親子の絆—  
まさむね  
きずな



宇和島信用金庫

——この街が好き、この街と未来を拓く——

「あっぱれ！なんと元気な男の子じゃ！」

宇和島の藩祖、伊達秀宗（幼名兵五郎）

は、一五九一年九月二十五日、陸奥の国

（現在の宮城县）で生まれました。

のちに、仙台藩をひらいた伊達政宗の  
初めての子どもです。

長く子宝にめぐまらず、この日をずっと

待ちわびていた政宗は、

「この兵五郎が伊達家の世つぎじや！」

と兵五郎を高くだき上げました。

兵五郎はみんなから「御ぞうしさま」

とよばれ、たいへんかわいがられて  
育ちました。

※「さうし…あとつき、二代目となる者への特別な呼び方。」



そのころ、天下を治めていたのは豊臣秀吉でした。

当時、全国の武将たちには、秀吉へ従う気持ちを示すため、妻や子を人質として、京都に住まわせる者もいました。

四歳になると兵五郎は、政宗に手を引かれ、京都の伏見城に秀吉をたずねました。

「この子が伊達家の世つぎ兵五郎です。  
どうかお手元で育ててください」

政宗は兵五郎を養子として、差し出しました。秀吉はたいそう喜びました。

兵五郎は秀吉の子、秀頼の遊び相手として大切に育てられることになります。

「これでゆくゆくは、兵五郎は豊臣家の  
えらい大名になるだろう」  
政宗はひと安心です。



六歳になつた兵五郎は元服し、秀吉の一字をもらい秀宗と名のりました。その時に、天皇にも会うことができる高い位を与えられました。

秀宗と二歳年下の秀頼は、まるで兄弟のよう育てられました。秀宗は主君である秀頼をいつも大切に思い、自分の立場をこころえて行動していました。

秀宗が秀頼と取つ組み合い遊びをしたとき、踏みつける前にとつさに、ふところから紙を取り出し、秀頼を直接踏みつけることはしませんでした。

秀宗は人質ではあつたものの、豊臣家の人びとからかわいがられ、立派な武将になれるよう育てられていました。これには秀吉の妻の淀殿をはじめ、その場にいた人びとが「さすがは政宗の子だ」と、秀宗の礼儀正しさと心構えに感心しました。

ところが、豊臣秀吉が亡くなり、豊々年、一六〇〇年の関ヶ原の戦いで徳川家康が勝つと、豊臣家で育つた秀宗の立場は難しくなってきます。



政宗は十二歳になつた秀宗を家康に会わせました。  
家康は江戸幕府を開く前に、政宗をはじめ全国の大名に、江戸へ人質を差し出すよう命じていきました。

秀宗は、今度は徳川家の入質になることが決まり、淀殿や秀頼と別れ、江戸へと向かうことになりました。

秀宗は江戸に行く前に、母にひと目会いたいと思いました。母は病気だったようです。そこで政宗に、「母のお見舞いに行つてもよいでしょうか」とたずねました。

母と子とはいえ、いったん家を出たら、そうそう会うことはできない時代です。政宗は会うことを許し、見舞いの品(雁と鮭)を持たせました。

その後、母は亡くなり、この見舞いが秀宗にとつて最愛の母との最後の別れとなつてしましました。



※雁：カモメ科の水鳥。昔は食用にした。

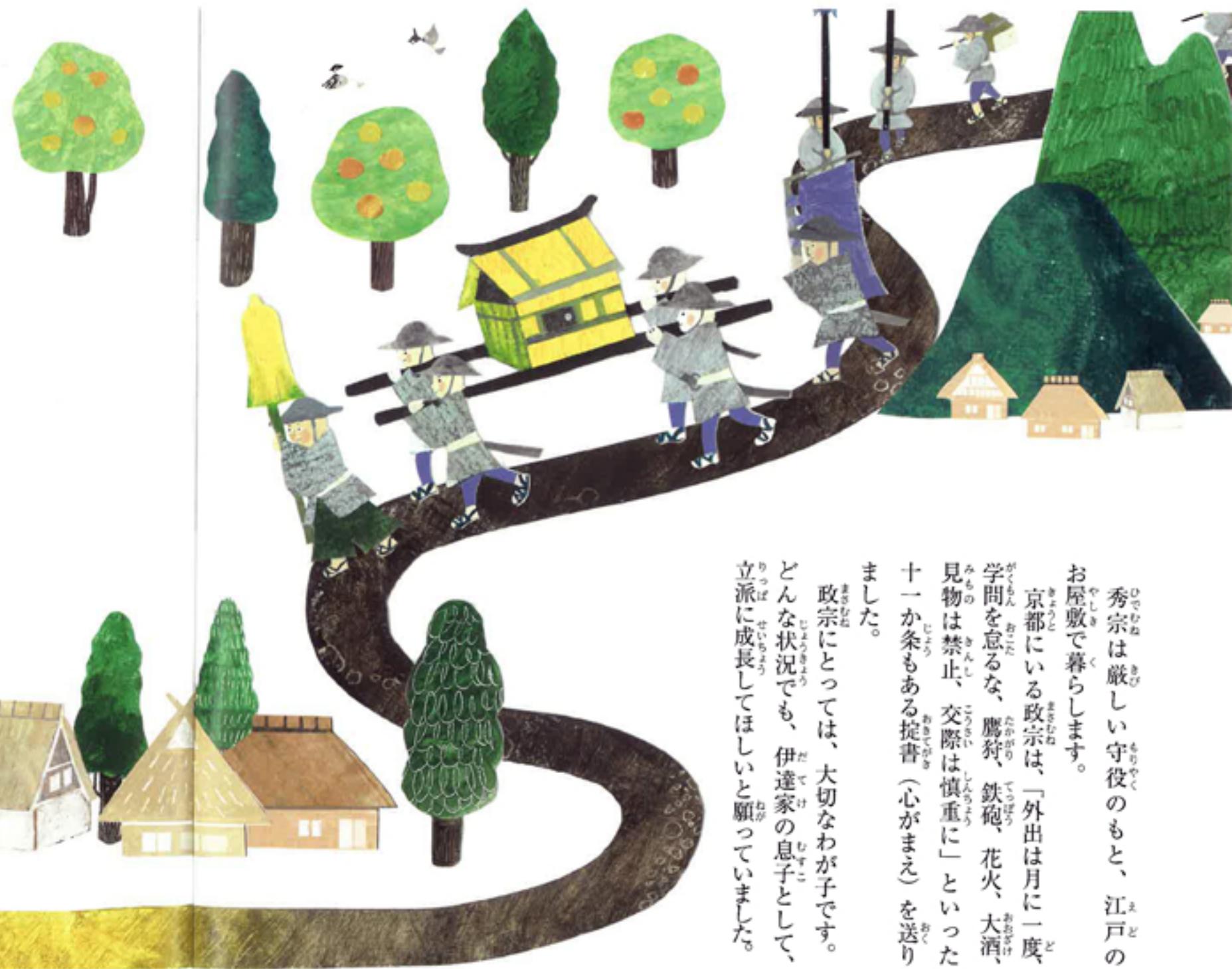
※元服：男子が成人になったことを示す儀式。



秀宗は厳しい守役のもと、江戸のお屋敷で暮らします。

京都にいる政宗は、「外出は月に一度、学問を怠るな、鷹狩、鉄砲、花火、大酒、見物は禁止、交際は慎重に」といった十一か条もある掻書（心がまえ）を送りました。

政宗にとつては、大切なわが子です。どんな状況でも、伊達家の息子として、立派に成長してほしいと願っていました。



十九歳の時、秀宗は家康の命令により、井伊直政の娘・亀姫と結婚しました。亀姫は、生まれた時から少しずつ親が用意した、豪華な嫁入り道具を持参して、伊達家に嫁きました。

翌々年、秀宗の八歳年下の弟、虎菊丸が、将軍秀忠（家康の子）の一字をもらい、忠宗と名のり、仙台藩をつぐことになりました。

政宗の気がかりは、豊臣家に育てられた秀宗をどうするかでした。

やがて、政宗は秀宗のために別家を興すことを考えつきます。



秀宗二十四歳の時、家康は豊臣家を滅ぼすため大坂城を攻撃します。

大阪冬の陣です。

政宗・秀宗親子は、一万の兵を率いて大坂城攻撃に参加しました。

武将の子として生まれたからには、戦いにのぞまなければ一人前とみなされない時代です。早く父の役に立ちたいと焦るような気持ちで過ごしていた秀宗は、堂々と初陣を飾りました。

父と子は、この戦いでめざましい功績をあげました。政宗の子の中でも、政宗と共に戦ったことがあるのは秀宗だけであり、二人にとつて特別な思いのある戦いとなりました。

このとき政宗は、「徳川に味方したからには、我が子、秀宗に領地を与えてほしい」と家康に強く求めました。

そして、冬の陣の直後、秀宗に宇和郡十万石が与えられます。  
家康は、政宗の必死の要求に折れたのです。  
將軍秀忠は、「以後、東国の伊達、西国の伊達と相並ぶよう」と秀宗をほめたたえ、家柄の高い国持並みの大名格を与えました。

こうして宇和島伊達家が始まります。  
將軍家から十万石を与えられたので、宇和島藩は、仙台藩の分家ではありません。



今から四〇〇年前の一六一五年、二十五歳の秀宗は、いよいよ宇和島へ向け、旅立ちました。

政宗は「船に乗る頃には海もおだやかになるであろう」と息子の船の旅を心配する手紙を送りました。

三月十八日、秀宗は家臣の騎馬隊（五十七騎と共に板島丸串城（現在の宇和島城）に入城しました。

宇和島の地を初めて見た秀宗は、「海と山に囲まれた、美しいところだ」と思いました。

五十七騎ほか家臣たち約一二〇〇名もの大行列はどこまでも続きました。

秀宗のりりしい姿は、宇和島の人たちの心を強く引きつけました。

「ここは、今から我ら伊達家の地、領民をいつくしみ、しつかりと治めて行こう！」

秀宗は決意を胸に刻みました。

五十七騎（政宗自ら選んだ五十七名の家臣たちのこと。先祖代々伊達家に仕えてきた者など、様々な由緒ある者たちで構成され、宇和島では特別な待遇とされた。）



政宗は遠く四国の領主となる秀宗を心配し、五か条の教訓を与えていました。

一、家康公と秀忠公に筋道を通して、御恩を忘れずお仕えすること。

二、家臣を大切にすること。

ただし、罪を犯した者は決して許してはいけない。

三、常に武芸に励むこと。

四、学問に励み、教養もたしなむこと。(園芸・将棋など)

五、家臣を思いやり、その心を理解すること。

右の五か条のほかにも言つておきたいことがあるが、あなたは利口な人だから、詳しいことは家臣に伝えておく。

その年の五月七日、大坂夏の陣で豊臣家は滅びました。

このとき、秀宗は宇和島にいました。

徳川家康から、

「戦いに参加しなくともよい」

と命じられていました。

家康としたら、豊臣のもとで育つた秀宗が

戦場においてはよくない、と考えたのかもしれません。

大坂落城や、淀殿と秀頼の自害などを、秀宗は政宗の手紙で知ります。

家族のような存在だった二人との、とてもつらくて悲しい別れでした。



秀宗は、宇和島藩を治める用意のために政宗から大金を与えられました。

秀宗は、このお金について、親子のことだから返さなくてよいと考えていましたが、政宗の付けた家老の山家清兵衛が、返すべきだと主張しました。

結局、毎年かなりの額のお金を返すことになり、家臣たちも苦しい生活をさせられませんでした。しだいに、清兵衛に反発する家臣が増えました。

また、清兵衛は事あるごとに秀宗の行動を政宗に報告し、政宗が宇和島藩のことに口を出してくるので、秀宗は面白くありません。

入部五年後の六月、とうとう清兵衛一家は屋敷で殺されます。

秀宗による成敗でした。

秀宗はおろか者なので親子の縁を切る！事件を知った政宗は激怒しました。

そればかりか、領地を返したい

と幕府に訴えます。  
宇和島藩は大騒ぎになりました。

多くの人がこの騒ぎをおさめようと動きました。その結果、幕府は「秀宗公の若さからの失敗」とし、政宗は訴えを取り下げました。



秀宗は江戸で政宗に会い、二人は初めて本音で話し合いました。

秀宗は幼いときから豊臣や徳川の人質として育ちました。

豊臣家では大切にされたとはいえ、いつも気を遣っていました。豊臣秀吉が亡くなつてからは、徳川陣営に取りこま

れていき不運な立場でした。

秀宗は長男に生まれながら、仙台藩主になれなかつたのです。

秀宗はずつと我慢していた自分の気持ちを打ち明けることができました。

政宗は、戦国時代を命がけで生き抜いてきた経験から、息子にも強くあつてほしいと厳しく接してきました。

しかし今まで、秀宗の気持ちを十分に考えていなかつたことに気がつきました。

父と子は和解します。

政宗はあらためて秀宗のこれまでの身上を思いやり、以降、宇和島藩のことに口を出さないことを約束します。



それからの政宗と秀宗に、おだやかな親子の関係がはじまりました。

秀宗は、政治に力を發揮して、領民をまとめていきました。

その一方で、政宗から藩主としての教養も身につけるよう言われていました。

政宗が、秀宗の和歌を手直しする手紙のやりとりが続きました。秀宗は、最初は和歌をよむのに時間がかかり、あまり得意ではなかつたようです。しかし、回を重ねるうちに、政宗にほめられるほど上達していました。

今でもたくさんの和歌が伝えられています。

秀宗は絵も得意でした。旅の途中で描いた絵に、「下手なので笑ってしまう」と書き加えたものも残されていて、ユーモアの心を感じます。

また、政宗は秀宗に、秘蔵の茶入や香木「柴舟」を与えます。

香木は、たくことで、よい香りを楽しむのですが、「柴舟」は、たく前からよい香りがする貴重なものでした。

こうして秀宗は、文化人としての教養を身につけ、その心を今度は、子どもたちへと伝えていきました。

宇和島は現在も、歴史や文化を暮らしの中で楽しむことができ、芸術や文学の分野などで活躍する人を多く世に出しています。

それは、こうした宇和島伊達文化と、恵まれた自然から育まれた感性によるものでしょう。



秀宗は、幸せなときや辛いとき、山あり谷ありの人生でした。

様々な土地で出会う人びとのご縁、そして父政宗との親子の絆を大切に生きました。豊臣家の時代が続いていれば、秀吉にかわいがられた秀宗は、重要な家来となり、活躍していたかもしれません。

時代の流れのなかで、秀宗は、宇和島の地を治める立場になりました。

自分の立場を理解し人生を受けとめ、未来に希望をもちながら、「西国の伊達」として、秀宗ならではの道を歩んでいった立派な大名です。

厳しい徳川幕府のもとで、藩が生き残るのがむずかしい時代に、秀宗は宇和島藩の基礎をつくりました。

そして、宇和島藩は明治維新の九代藩主まで、二五六六年もの長い間、引き継がれていきました。

二〇一五年は、秀宗公が宇和島に入部してから、四〇〇年目になります。

この記念すべき四〇〇年の貴重な機会を体験できるのは、ここに今生きているわたしたちだけです。

わたしたちが大人になり、子どもをもち、孫ができるころ、そして、次の五〇〇年の時には、わたしたちの街、宇和島はどうになっているでしょうか。

秀宗公がひらき、ここに住む人びとが、受け継いで来た歴史と文化、海と山に囲まれた自然豊かな宇和島に誇りを持ち、しっかりと未来へ残し、つなげていきましょう。

—引き継ごう 笑顔と愛と

郷土の文化（宇和島家族宣言より）—



# 秀宗公ゆかりの資料

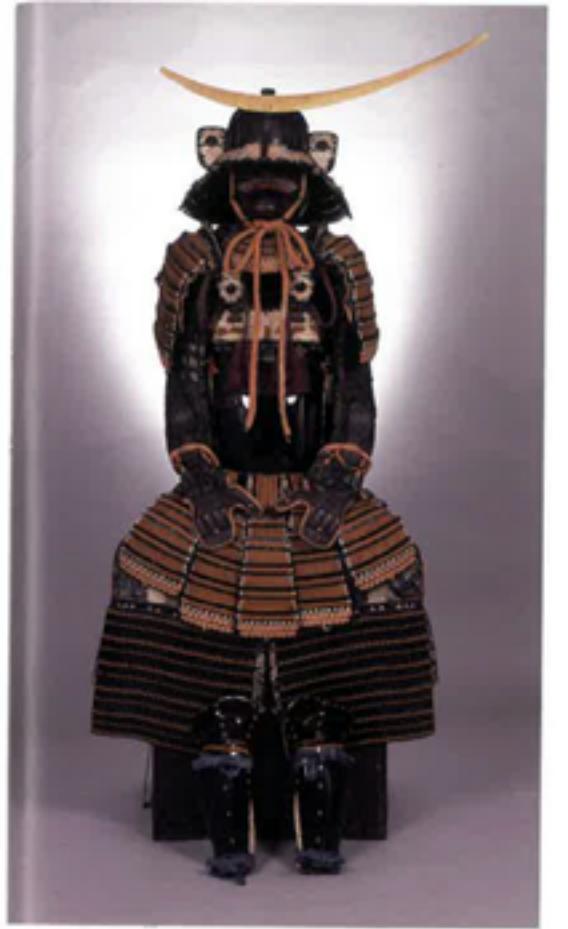
戦国時代のファッショニヨンリーダー  
でん おなじみがつちゅう

## 伝政宗甲冑

当甲冑は政宗所用と伝えられ、桃山末期あるいは江戸初期に作られたと推定されている。

兜の前立てはおなじみの二四目。これから月が溝ちていく溝月の形をもとに、右から左上へ長く流れているのは、太刀を振りかざしやすいように「デザイン」されている。

実践向きの工夫がある一方、全体の黒っぽい配色は、涼さと華麗さを併せ持ち、指導者として自己の存在感を示しつつ、お洒落な政宗らしいものである。なお、日本一大きな甲冑も、宇和島市立伊達博物館に保存されている。(宇和島伊達家二代宗質所用)



わのあたり とうじょうう ジュラシック・ワールド  
物語に登場する重要人物たち

## 伊達秀宗

(一五九一—一六五八)  
宇和島藩の初代藩主。初代仙台藩主伊達政宗の長男。  
一五九六年に秀吉猶子となつて元服。秀吉の一子を受け、秀宗と名乗つた。一六〇九年に徳川氏の人質となり、家康の命で彦根藩主井伊直政の娘姫姫を夫人とする。一六一四年に大阪冬の陣の功績により、宇和郡十万石を拝領し、翌年、宇和島に入部。異母弟に仙台藩一代藩主伊達忠宗がいる。

## 伊達政宗

(一五六七—一六二六)  
秀宗の父親。戦国大名で、伊達氏の第十七代当主。仙台藩の初代藩主。東北を統一し、独眼龍の異名を全国にとどろかせた奥州の雄。その才は、武辺のみならず文化（茶道・書道・和歌）・産業など多岐に渡つていた。戦の表裏が絢爛であったことから、手でしゃれた者を「伊達男」と呼ぶようになつた。戦国武将としての活躍と「伊達男」ぶりは、古くから小説などで人気が高い。

## 豊臣秀吉

(一五三六—一五九八)  
織田信秀（信長の父）の足軽の子として生まれた。信長の後継の地位を得て、莫大な権力と財力をもち、大阪城を築き、天下統一を果した。戦国時代を生き、苦労して大出世した英雄。朝鮮と明へ侵略を図つて出兵したが、失敗に終わり、豊臣家滅亡の原因となつた。

秀吉の死後、関ヶ原の戦いで石田三成を破り、征夷大将军となり江戸に幕府をひらいた。



## 秀宗甲冑

カリスマ父を持つ息子

秀宗の甲冑は、兜の左右にある吹き返し（刀が当たらぬよう顔を守る部分）に仙台城の竹に雀紋が付けられている。前立ては兜型。寄贈者は島内家。島内家の起りは、宇和島藩第四代村元（一七〇五年—一七三五年）の二男忠國が一家を立てたとほじまる。



社会の教科書でおなじみとよみひでよしがそく

## 豊臣秀吉画像

秀吉の肖像画のなかでも、最も知られているもののひとつで、教科書などに使われている。狩野光信筆。制作を依頼したのは、秀吉の側近であった富田一白（知信）で、「さ主君への恩に報いようと描かせた」。一白の子・信高が一六〇八年宇和郡に移ったときに、父の供養に金剛山正眼院（現金剛山大隆寺）を建立し、この塗を奉納したが、幕末に住職から八代藩主宗城に献上された。

五つある国の重要文化財の大間画像のうち、一番大きな肖像画である。



## 宇和島伊達家の家紋

竹に雀

宇和島姓とよばれる「竹に雀」の紋は、竹輪笠に二羽の雀が向かい合つている。籠の縁は朝を示し、左右非対称は世に一つと同じものがないことを表す。

丸に綱櫛三本の「綱三つ引紋」は、伊達家の始祖朝宗が奥州征伐の際に、源頼朝より拝領された紋といわれている古く由緒ある紋。「九曜紋」は、細川家から譲り受けたもの。

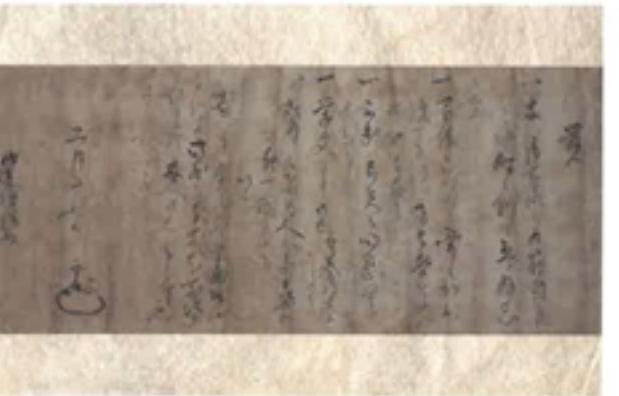
父・政宗も、生まれる時代がもう少し早いければ、天下ととっていたかもしれないなあ…



# 伊達家ゆかりの資料

筆まめの父が息子に書いた

五条の教訓



秀宗自作の書と絵画  
ふじさん



息子たちへ贈つた櫻上の名香  
こうばくしほふね



政宗は未知の土地での秀宗の領国經營を心配し、五か条の教訓を記した。これは巻物になつて「貞山公御教諭」として公益財團法人子和島伊達文化保存会に伝來する。

富士山は、当時の人がどの目にすることができる景色の中で、とくに強く心を打つ存在であったようだ。秀宗も右の富士山図をはじめ、次のような和歌も残している。

「時しらぬ山なりけり」ときくからに  
雪のうちにもなくほととぎす

父から子へ贈られた極上の名香、柴舟  
といふ名前は政宗がつけたもので、  
西田「茶亭」の  
「豪きを身に積む柴舟や、焚かぬむのも  
り焦がるるむ」  
から採られた。  
焚く前から匂う、それほどの名木であ  
るとの意味が込められている。  
これは、仙台一代藩主政宗にも贈られる  
が、現在宇和島伊達家にのみ残つてゐる。



三〇〇年前のある日の宇和島

宇和島城下絶賀所  
「宇和島」という地名は、伊達氏入部に始まると考えら  
れている。

この屏風絵には宇和島の光景が細かく生き生きと描かれている。そこには、人間だけでなく、犬などが走っている姿まで描きだされているため、当時の城下町の様子を細かく知ることができる貴重なものである。作者不明。

全体の画面は四枚のふすま絵と考えられているが、左端部分の一枚は不明で、現在は三枚分のみが残されている。三枚のふすま絵が、現在は六曲一隻（六枚に折りたたむこと）できる屏風（一組）に表装されている。

一説には、描かれている建造物から、一六九五年頃に制作されたと考えられている。

江戸時代のある日の宇和島が、一画面そのまま切り取られたような貴重なものである。



堺城を囲む五角形の堀は、藤堂高虎の作。五角形平面の堀張り「空角の経始」は四角形平面の城と錯覚させるための巧みな設計といわれる。

# 宇和島伊達家ゆかりのスポット

字和島を一望できる優美な城  
うわじまじょう

## 宇和島城

三大築城名人藤堂高虎により築城された名城。国の重要文化財。国内現存天守十二城の一つ。江戸時代を通じて伊達氏が城主。二代宗利が老朽化した城の修築にとりかかり、今の三重三階の天守閣に建て替えられた。



七九年一年創建の古社で、祭神は景行天皇の子である宇和津彦命と妹相高彦根命、大口貢命。南子先方の總領守として「宮原」として親しまれ呼ばれている。十月二十九日の秋祭りには、伊達氏とともに東北から伝えられたというハツ庭踊りが奉納され、牛鬼の先導する神輿が町を練り歩く。



家老山家清兵衛を祀る  
われいじんじゃ

## 和靈神社

祭神である山家清兵衛は、秀宗の元で、産業の拡充、民政の安定に手腕を発揮したが、凶刃に倒れた。その後この事件に関与した者が相次いで海難や落雷で変死した。人びとは清兵衛の怨霊だと恐れ、その靈を鎮めるために、神として祀ったことが始まり。その後、護國・産業振興の神として西日本各地に信仰が広まった。



四季折々の風情が楽しめる  
てんしゃえん

## 天教園



日本一の長寿大名として知られる七代藩主伊達宗紀（春山と号し百歳長寿）が隠棲につくつた大名庭園。国指定名勝。名の由来は政宗の没時の一節、「残躯は天の教す所楽しまずして是を如何せん」から。珍種も含め約二十種類もの竹や笹が植栽されていて、藤原氏とも関わりが深いことから、六基の藤棚がある。

秘蔵の宝物を堪能できる  
だてはくぶつかん

## 伊達博物館



伊達家浜御殿跡に建てられ、全国でも屈指と言われる古文書類、武具、甲冑、調度品等を展示。また、日本一古い白旗（国旗）など、日本歴史上貴重な品物が多い。豊臣秀吉の肖像画は国の指定重要文化財。展示物はレプリカではなく、全て時代を経た本物。保存状態もよいが、現代の技術では制作不可能なものも多い。

大名文化の薫り高い逸品を見ることができる。歴代の婚礼調度品や舞人形なども女性に人気である。



## 龍華山等覚寺

伊達家の菩提寺。秀宗が母の菩提を弔うために一六一八年に建立。初代秀宗、二代宗利、三代宗貢、四代村年、六代村慶、八代宗城の墓がある。



## 金剛山大隆寺

歴代藩主が眠る  
だてけぼだいじ

## 伊達家の菩提寺

伊達家の菩提寺。五代村候、七代宗紀、九代宗徳の墓と山家清兵衛の墓「和靈廟」もある。一〇一〇年に山家清兵衛没後四〇〇年を迎える。

24

# 宇和島信用金庫 IDEA



宇和島信用金庫 IDEA は、私たちの目指すべき方向やるべき姿を定めた、企業理念体系です。

企業理念は創業の精神を尊重した「愛郷心と人生美の創生」とし、目標とすべき5つの方向軸を明確にしています。IDEA の五角形の形は、宇和島城を中心に五角形に形成され繁栄した宇和島の街と重ね合わせ、地域に密着した金融機関として、末永く、地域から愛され必要とされる信用金庫で在り続けられるよう願いを込めています。

絵本「伊達秀宗公物語～政宗との親子の絆」は、宇和島信用金庫 IDEA のもと、うわしん伊達文化 NEXT100 プロジェクトの一貫で制作されました。

未来を担う子どもたちに、宇和島のすばらしい歴史・文化を知って欲しい、そして長く継がれていくものを残していきたいとの想いです。

子どもも大人も一緒に楽しみいただけすると幸甚です。

うわしん伊達文化 NEXT100 実行委員会  
2015年 6月 15日「信用金庫の日」



後援

宇和島市教育委員会

## うわしん伊達文化 NEXT100 プロジェクト

宇和島地域は、宇和島伊達家の歴史とともに、市民の生活文化、経済・産業が発展してきた背景があります。

宇和島藩伊達家 初代藩主 伊達秀宗公が宇和島に入部し、2015年で400年を迎える節目に、宇和島地域に生活し、この街に生かされている私たちの使命を認識し、未来の経済発展を見据え、次世代へとつなぐ大切な機会にしてまいりたいと考えます。

企画編集 伊達 実紀

繪本制作 荒木 敦子

物語原案 宇神 幸男

監修協力 平井倫子（宇和島市立明倫小学校 校長）

本田耕一（宇和島市教育委員会宇和島伊達博物館館長）

志後野道希世（宇和島市教育委員会宇和島伊達博物館学芸員）

特別協力 公益財團法人宇和島伊達文化保存会

宇和島市立伊達博物館

参考文献 「いくさ場の元氣」、佐藤憲一「伊達政宗の手紙」、宇和島伊達家正家書目録

「仙台市博物館館蔵名品図録」、宇神幸男「シリーズ物語宇和島藩」

企画制作 うわしん伊達文化 NEXT100 プロジェクト 実行委員会

委員長 村尾 明弘（理事長）、清家 義幸（常務理事）

浜田 竜也（恵美須町支店長）、船田 克己（業務推進部副長）

久保 文亨（新橋支店）、二宮 啓子（業務推進部）、宮本 幸美（業務推進部）

株式会社コトヴィア

萩原 実紀、田中 挙子、リチャーズ 智恵子、荒木 敦子